



ボリビア独立200周年記念 第3号



憲法上の首都スケレのコロニアル時代の街並み 撮影：風景写真家 松井章氏

1. 知られざる魅力を放つボリビア企業紹介 小野村 拓志
2. ボリビア 2025年大統領・議会選挙をめぐる考察 宮地 隆廣
3. ボリビア画家列伝[2] —Madlovio Marconi H.— 風樹 茂
4. 日本人移住地訪問記(5)
—コロニア・サンファンとコロニア・オキナワを訪ねて— 松井 章
5. 開拓記外伝 コロニアオキナワ 13 渡邊 秀樹

一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

1. 知られざる魅力を放つボリビア企業紹介

駐ボリビア日本国特命全権大使
小野村拓志

はじめに

2025年11月18日、サッカーの国際親善試合日本対ボリビアは、「ゴオール！」の連呼がボリビアの早朝に3回響き渡り、日本の勝利に終わった。

その日から10日前、第一回投票で大方の予想を裏切り大統領選挙決選投票を制したロドリゴ・パス氏の大統領就任式だった。開始直前からの大雨で、世界各国から参加した来賓が濡れながら会場の国会議事堂に参集した。日本的には不吉な印象だが、パス新大統領は「偉大なる母なる大地を清める雨」が就任を祝ってくれている、と高らかに就任を宣言した。

ロゴリゴ・パス政権は中道右派で、米国との関係改善や為替の一定の自由化(クローリングペッグ制)の導入、貿易や外国投資の自由化などを積極的に進める方針を示している。こうした流れは、日本企業のボリビア市場参入・事業展開への門戸を開き、日本-ボリビア間のさらなる経済交流の発展に寄与すると期待している。

本年、建国200周年を迎える、20年にわたる左派政権から中道右派に舵を切ったボリビア。日本企業の国際ビジネス展開を促進するジェトロ出身大使の視点から、ビジネスチャンスを感じた当地企業を紹介したい。ここで紹介するのはこの3年間でボリビア中を走り回って訪問した企業の一部であり、その他の企業等の概要については、下記の在ボリビア日本国大使館HPの「大使の活動」を参考願う。ただければ幸いである。

<https://www.bo.emb-japan.go.jp/itpr/ja/activida-des-del-embajador/00001.html>

産業概観

ボリビアは鉱業や農業などの一次産業が中心である。概ね日本の業務形態でいう個人経営や中小・零細企業が大部分を占め、大企業は国営企業か周辺国資本の企業

業に限られる。そのため製造業においては設備投資が進んでおらず、製造業で使用されている設備の多くは初步的かつ老朽化したものが多い。今後、新政府により産業化が進められれば、日本の進歩的または環境保全に配慮した生産設備のニーズが高まると思われる。

また、前左派政権の貧困対策を中心とした経済政策により、商業都市であるサンタクルスを除いては、消費財分野での外国企業のビジネス展開が遅れている。一定数の富裕層は存在しており、高品質・高価格なものの市場ニーズはあるため、今後の為替の安定やドル不足の解消により、日本製品に対する購買意欲も高まっていくと思われる。

さらに、地形的にも民族的にも多様性を持つボリビアならではの製品や、ボリビアの社会課題解決を目指したスタート・アップ企業も少しずつ生まれてきており、日本のスタート・アップとの連携の可能性も大いに期待できる。

QUANTUM社—電気自動車を製造するスタート・アップ企業—

ボリビアの物流の要衝であるコチャバンバ市郊外に車を走らせ、主要道路から外れ樹木が鬱蒼と茂る未舗装の小道をゆっくりと進むと、突然視界が開け、5,000平米ほどの倉庫のような建物が出て迎えてくれる。ここがボリビアで唯一自動車を、それも電気自動車を製造しているスタート・アップ企業「QUANTUM」社の工場である。



写真1-1 Quantum社の最新 型試作車について熱く 語る創業者



写真1-2 Quantum社は各国から視察を受け、確実に市場を拡大している(同社のHPより)

2023年5月に同社を訪問したが、その際はまだ20から30名ほどの従業員で、運転席に1名、後部座席は子供であれば2名乗れる、シンプルな超小型電気自動車をほぼ手作りで製造していた。

同社は2017年から試作品の製造を開始し、2019年に創業。現在までペルーを皮切りに、パラグアイ、エルサルバドル、メキシコに輸出している。メキシコにはモーターの製造拠点も合弁で開設している。さらに2022年には自前のリチウムバッテリー製造会社も開設した。現在では、電動キックボード、電動スクーターから5人乗り小型自動車まで製品ラインアップを拡大している。最新の5人乗り小型自動車「ECUTE」は8時間のフル充電で300キロ走行可能で、急速充電(フル充電まで46分)にも対応している。

訪問した際には、「近い将来、太陽光発電パネルを装着し、航続距離をさらに伸ばし、すべての製品をネットで繋ぎ、バッテリーの状態の監視などを進めたい。」と2人の創業者が熱く語っていたのが印象的だった。

行政上の首都ラパスはアンデスの山々に囲まれ、標高が4,000メートルを超える地域もあるため、急勾配での走行を余儀なくされるが、そのラパス市でもよく同社の車

を見かけるようになった。ガソリン不足とも相まって、今後急速な普及が見込まれる。

安全性能やバッテリーのリサイクル問題等が解決できれば、日本の中山間地域でのニーズにマッチすると思われる。

Delizia社—エル・アルト市の工場で生産する多様な乳製品を国内に幅広く供給—

アンデス山脈のアルティプラーノ(アンデス山脈のオクシデンタル山系とオリエンタル山系に挟まれた標高4,000メートルを超える高原地帯)に位置するエル・アルト市は、隣接するラパス市と異なり平坦な土地が広大に広がるため多くの工場が立ち並んでいる。そこに1988年創業のアイス・牛乳・ヨーグルト等の乳製品を製造する「Delizia」も工場を構えている。

原材料となるミルクはラパス県内から調達をしており、ボリビアでは日常茶飯事の道路封鎖によるサプライチェーンへの影響も少ない。

生産工程はほぼ自動化されており、イタリア製の小規模なラインで多様な製品を生産している。また、衛生管理も徹底しており、近隣諸国への輸出に十分耐えられる品質であるが、ボリビアにも進出しているペルーの大手乳製品メーカーである「PIL」と競合することから、現時点で

は国内市場のみでビジネス展開している。



写真1-3 Delizia社のアイス製造工程の視察



写真1-4 Delizia社の抹茶アイス。上部はきなこのような風味のチキタニア・アーモンドのアイスで、抹茶との相性が抜群

販売先は国内各地の大手スーパーから零細商店まで幅広く、同社製品を扱ってくれる店には同社の専用冷凍ショーケースを無料で配備している。また、自社のアイスクリーム専門店「Tentación」も主要都市に展開し、新たな製品開発のパイロット拠点となっている。日本の天皇誕生日レセプションでは「抹茶アイスクリーム」の試作品を紹介してくれた上、その後「Tentación」で本格的に販売し、抹茶の普及に協力してくれた。目下、業務用抹茶パウダーの継続的調達可能先を探しているとのことである。

また、日本製の生産ラインの導入に关心があり、大使館経済班から複数の日本の大手冷凍食品製造機械メーカーを紹介させてもらったが、日本メーカーの提供する生産ラインの規模が同社には大きすぎるため、現時点では未だ導入には至っていない。

最近では米国向けにボリビア産コーヒー生豆の輸出を開始し、日本で開催されているアジア最大級の国際食品・飲料展FOODEXにスーパーフードのキヌア・キヌアミルクを出展するなど、製品の多角化に積極的に取り組んでいる。

Alcos社—自然由来の生薬をもとにした医薬品の製造会社—

ボリビアには多くの先住民族が存在し、中にはさまざまな地域を放浪し、各地の薬草を研究し、その知識を踏まえて旅先の病人を治療している「カリヤワヤ族」と言われる部族もいる。コカインの原料となっているコカの葉も薬用植物の一種であるが、さまざまな生薬をもとに伝統医療が民衆の生活に根付いている。

Alcos社は、こうした伝統医療を科学的に活用し、自然由来の生薬をもとに医薬品を製造している。創業は1976年で、現時点では海外展開はしていないが、将来的な輸出可能性を見つめて、ISOなどの国際基準・認証の取得を積極的に進めている。



写真1-5 Alcos社の品質管理は厳重で、視察の際も国際基準での管理が行き届いている。

最近では、原料となる薬用植物の生産者の貧困対策や持続可能な生活の実現を目指した商品に特化した子会

社「Naturalcos」を設立し、ブラジリアン・ナッツやキャッズ・クローを原料とするハンドクリームや、マカのサプリメントなどを販売している。

日本の漢方薬との親和性が高く、原材料となる生薬の調達や新製品の共同研究などの面で協業の可能性があるのではないかだろうか。



写真1-6 Alcos社の子会社が開発したハンドクリームとマカのサプリメント

Belmed社—アンデス山脈から湧き出る自然水を活用したヘアケア・コスメティック製品を製造—

行政上の首都であるラパス市に、ヘアケア製品やヘアカラー、ネイル製品、ボディーケア製品を製造する「Belmed」社の工場がある。アンデス山脈から湧き出る自然水を活用してラパス市中に給水する水道局浄水場に隣接する。その一帯には社員寮や運動場などが広がり、さながら一つの村を形成している。

同社の歴史は、ドイツのヘアケア製品「WELLA」のボリビアへの輸入から始まり、1992年には総代理店として「WELLA」ブランド製品の製造販売を開始した。現在では自社ブランドも展開するなど、国内外で信用を得ている。

ボリビアは日本人に髪質が似た先住民族や、世界各国からの移民の受け入れにより、多くの髪質が存在するため、製造拠点に併設された研究所に加え、国内各地に自社のヘアスタジオを設立し、日々さまざまな髪質に合わ

せた商品開発・改良をおこなっている。

また、個々人が持つさまざまな髪の悩みを聞き取り、好みの香りと調合するオーダーメイドの商品も展開している。最近では人間だけでなくペット用の商品開発にも力を入れている。

同社は日本のヘアケア・コスメティック企業の輸入販売やOEM生産にも関心を示しており、今後の協業が期待される。なお、同社オーナーの子息は現在、ボリビア工業会議所会頭を勤めており、ボリビア経済界に大きな影響力を持っている。



写真1-7 Belmed社工場前で企業理念を熱く語る同社幹部



写真1-8 Belmed社ヘアケア製品の品質管理が行き届いた生産ライン

Protel社—セキュリティシステムの構築と見守りサービスへの発展—

ボリビアは中南米諸国の中では夜間の独り歩きにも不安がないほど治安の良い国であるが、それでも窃盗などの犯罪防止のために、主要な施設には監視カメラなどのセキュリティ・システムが設置されている。中でも特にセキュリティ・レベルが高い施設でよく使用されているのが「Protel」社のシステムで、日本同様同社のシステムが設置されていることを示すラベルが目立つ場所に貼られている。



写真1-9 Protel社はトータルなホームセキュリティシステムを提案している



写真1-10 Protel社が新たに開設したサンタクルスの事務所で今後の展開を熱く語るカマチヨ社長

同社はカナダや米国の高品質な機器をシステムに取り入れており、機器の販売だけでなく、施設や家庭の状況に合わせたセキュリティ・システムの構築を提供している。さらに、システムの設置だけでなく、異常時の駆けつけ

けサービスやGPSを活用した子供や高齢者の見守りサービスなども行なっている。

同様のサービスを提供している日本の警備会社との連携や、より高品質なセキュリティ機器の供給面で、日本企業とのビジネス構築の可能性を感じた。

cooltiva社—ネットを活用し、農産物生産者とレストラン等事業者を繋ぐ—

VCILAT (Voces de Cambio e Innovación para Latinoamérica)によって、2025年のボリビアにおける最優秀スタート・アップ企業に選ばれたのが「cooltiva」である。同社はサンタクルスの商工会議所スタート・アップ促進協会の支援を受けて設立された。ビジネスモデルは、ネットを活用して農産物生産者とレストランを繋ぎ、直接取引をさせるというものである。

ボリビアの国土は日本の3倍で、人口は日本の10分の1。多くの道路は舗装されておらず、物流過程でのフードロスは20%と言われている。また、多くの農業従事者は小規模農家で、近隣都市の市場に自分の商品を持ち込み販売しており、国内に広く供給されることはない。

こうした社会課題に目をつけ、品質の良い商品を生産している農家と、新鮮で質の高い商品を求めるレストラン等の事業者をインターネット上でマッチングさせ、生産者には持続可能な生活を維持できる収入増を提供し、レストラン等の事業者には複雑な中間マージンの削減によって通常より低い商品価格を提供することに成功している。さらに必要なものを必要な時に必要なだけ提供することにより、フードロスの課題も解決しようとしている。

同社は現在、供給先をボリビア国内だけでなく、中東にも拡大している。日本にも同様のサービスを提供している企業があるが、市場の新規開拓の面で協力できる分野があるのではないだろうか。



写真1-11 cooltiva社の本社。スタート・アップらしく、コ・ワークオフィスを活用して、若い起業家同志で頻繁に意見交換をしている。

終わりに

ボリビアは前述のとおり20年間の左派政権の継続で、西側先進諸国との積極的な経済交流の道が閉ざされてきた。足下では主要な輸出產品であった天然ガス産出の減少による外貨不足や、それに伴う燃料不足に喘いでいる。ロドリゴ・パス新政権は、これらの問題を早期に解決し、さらには司法制度の改善や不法取引の削減を実現させ、「不信感」を払拭し、並行して外資誘致政策を打ち出すとしている。

一方、大規模な産業化が遅れているボリビアにも確実に興味深い企業が存在している。まさに海なし国であるボリビア市場は開拓しがいのあるブルーオーシャンならぬ「ブルージャングル」である。ボリビアの豊かな自然を保全しつつ、日本にとってもボリビアにとっても、そして気候変動に苦しむ世界にとっても有益な、日本企業ならではの取り組みが期待されるところである。

ボリビアは2024年にメルコスールに正式加盟し、現在実行に向けた取り組みを進めている。本稿が日本企業の新たなビジネス開拓の一助になれば幸いである。

(※本稿は個人の見解であり、筆者の所属組織の見解を示すものではない。)

2. ボリビア2025年大統領・議会選挙をめぐる考察

東京大学大学院総合文化研究科教授
宮地 隆廣

1 はじめに

2025年8月18日、ボリビアで大統領・議会選挙が実施された。大統領選挙では当選者が確定せず、10月19日の決選投票の結果、キリスト教民主党 (PDC) のロドリゴ・パスが勝利した。2005年から2020年まで大統領選挙で連勝した社会主義運動 (MAS) は敗れ、ボリビア政治史における一つの時代が終わったと言える。本稿はこの選挙に関する論考や報道を批判的に検討しつつ、パス政権発足の背景とその含意を考察する。参考資料の引用は文中にカッコを付して示す。年の表示がないものは2025年に発表されたことを意味する。

今回の選挙の制度的概要は次の通りである。

- ・大統領: 大統領と副大統領の候補ペアを選出する。任期は5年である。選挙管理委員会(選管)に登録された政治団体から立候補し、無所属では出馬できない。首位の得票が有効投票の過半数か、有効投票の40%以上かつ次点との差が10ポイント以上ならば、その者が当選する。そうでない場合は上位2名による決選投票を行い、勝者を当選者とする。
- ・議会: 上院と下院の議員を選出する。大統領と同様、任期は5年で、無所属の立候補は不可である。上院は県を選挙区とする定数4の比例代表制である。県は9つあるため、上院の定数は36である。下院の定数は小選挙区(つまり定数1)63、県を選挙区とする比例代表(定数は県人口に応じて配分)60、先住民議席枠(7県で各定数1)7、計130である。
- ・投票: 投票は有権者の義務である。投票用紙は上段に大統領候補者、下段に下院小選挙区候補者の顔・政治団体のロゴ・四角の空欄が並び、各段で選んだ候補者の空欄にチェックを入れる。大統領候補者への投票は議会両院の比例代表区の投票を兼ねる。

2 ボリビア政治史の概要¹

今回の選挙の意義は、歴史的背景を踏まえると理解が促される。その起点は、政治制度の民主化を求める国民革命運動（MNR）が大衆蜂起を率い、実力で政権を奪取した1952年4月の革命である。MNR政権は普通選挙権を保障し、大手鉱山企業を国有化するなど、現在にも影響を与える大きな改革を行った。農地改革も行い、政府与党と農村部住民の接点となる農民組合を全国に組織した。農民組合は、MNRが選挙の際に有権者を動員する役割も担った。

1964年からは軍が政権を支配した。政府が市民の経済活動に介入しつつ成長を図るMNRの開発戦略は維持されたが、工業化志向の軍は小規模農家の保護には消極的で、農民組合をMNRほどには重視しなかった。1970年代には国外から多額の借入を行い、産業振興のための財政支出に振り向けたものの、成果は乏しく、債務返済の目処が立たなくなつた。

1982年に軍は政権を離れ、文民政権が債務の対応に迫られた。1984年に年率1万%を超えるインフレが発生すると、その後の政権は連立与党のことで、国営企業の民営化、貿易の自由化、福祉の縮小などいわゆる新自由主義の政策を実施した。新自由主義は政府の役割の縮小を志向する意味で右派が游む政策だが、役割の拡大を志向する左派政党である革命左翼運動（MIR）の大統領もまた、公約に反して新自由主義を推進し、支持者の期待に背いた。結果として、物価は安定を取り戻した一方、貧困や格差は解消されなかつた。

1997年のアジア通貨危機に端を発する不況が到来すると、新自由主義の継続が困難になった。2000年から政府を批判する抗議行動が多発し、2005年の大統領選挙で左派のMASが勝利した。なお、同様の現象はラテンアメリカ全体で見られ、これは左傾化と呼ばれる。

MASの起源は農民組合にある。コチャバンバ県熱帯低地部の農民を率いるエボ・モラレスを中心に、農民組合を代表する政党を作る運動が1990年代に本格化した。その公約は新自由主義を廃し、政府が社会問題の解決

に積極的な役割を果たすこと、そして人口の過半数が先住民であることを踏まえ、スペイン語や個人主義などヨーロッパ的価値を前提にしない、多様な民族を尊重する制度を作ることにある。既存の左派政党が有権者の信頼を失つたことで、新自由主義を推進する政府に向けた批判票はMASに集中した。

2006年から2019年まで続くモラレス政権は様々な改革を行つた。天然資源開発を行う企業への課税を増やし、高齢者や就学児などを対象に現金を給付するなど、経済に対する政府の介入の度合いを高めた。また、ボリビアを多民族国と定義する憲法改正を行い、先住民語の公用語化や先住民議員枠の保障など、民族の多様性を重視する制度を導入した。天然ガスをはじめとする主要輸出品の国際価格が高騰したこと、モラレス政権は好況に恵まれ、潤沢な税収が政府の活動を支えた。モラレスも大統領選挙で3連勝を収めた。

2014年に始まるモラレス第三次政権は、主要輸出品の国際価格低下による景気後退に直面した。一方、モラレスは政権の継続を自論み、大統領の再選を一度しか認めない憲法の規定を実質的に廃止した。2019年の大統領選挙ではモラレスの勝利が速報されたが、これに不満な市民が激しい抗議行動を起こし、軍や警察も取締りに消極的であった。モラレスらMASの主要政治家は国外に逃れ、上院第二副議長のジャニネ・アニエスが大統領となつた。

アニエスは次の選挙を準備する暫定政権を担つたが、右派政党に属することから、暴動を唆した罪などでモラレスらMASの主要政治家を訴え、選挙を有利に進めようとした。ところが、2020年の大統領選挙にて右派政党は候補の一本化に失敗し、MASのルイス・アルセが過半数の得票で勝利を収めた。議会選挙でも、MASが両院で単独過半数の議席を得た。

3 アルセ政権²

アルセ政権の動向は2025年選挙の趨勢を決めた。アルセがまずMASの正当性の回復を試みた。モラレスへ

の告訴を取り下げ、アニエス政権下で2019年選挙に連して逮捕された人に恩赦を与えつつ、逆に100名を超える人物を汚職などの理由で告発し、アニエスら主要政治家を収監した。しかし、モラレス政権期以来の経済の不調は続いており、2020年の新型コロナウイルス感染症の拡大で景気はさらに悪化した。成長率は2021年にマイナス11.4%を記録し、その後はプラスに転じたものの、2025年前半期は再びマイナス2.4%に落ち込んだ。固定相場制のもと、輸出が低迷する一方で、輸入は硬直的で十分減少しなかったため、外貨準備も大幅に減少した。その額は2014年の151億米国ドルから2025年10月末時点の30億米国ドルへと落ち込み、輸出高に照らして保有すべき最低水準にからうじて達する程度となった。インフレ率も10月締めの年率で2024年が7.9%、2025年が22.2%と高水準になった。

選挙前の不況は与党を不利にするが、これに追い打ちをかける事態も生じた。MASでは農民組合など支持団体が大きな発言力を持ち、モラレス政権期には選挙の立候補者や大臣など主要公職者の選定を行っていた (Ariana 2019)。しかし、アルセは団体の指示に必ずしも従わなかった。やがてMASや支持団体の中に、モラレスとながりの薄い人々を中心に、アルセを支持する集団が登場し始めた。

MASが分裂を始めた背景にはアルセの経歴が関係している。アルセはラパス市に生まれ、大学で経済学を修め、中央銀行に勤務した後、モラレス政権のほぼ全ての時期で経済担当相を務めた。農村に生まれ、組合で長年活動してきたモラレスのように、自身のことを組織として支持してくれる地盤がアルセにはない。アルセが大統領選挙に立候補できたのも、大臣としての手腕が与野党を問わず高く評価されたことを踏まえ、モラレスら市民団体を動かせる者がアルセを推したからであった。最近発表されたアルセに対するジャーナリストのインタビューによれば、モラレスがアルセに対し、支持団体との交渉はモラレスを通じて行うよう命じ、アルセは団体と自由に政策協議ができなかつたという (Bustillos a, b, c)。これが正し

ければ、アルセは從来からの党運営の主導権を手放さないモラレスと対抗すべく派閥を作った、あるいはモラレスを迂回すべく派閥を作るしかなかつたことになる。

4. 大統領選挙の主な候補者

MASの分裂は同党の大統領候補の選出に大きく影響した。まず、最有力候補であるモラレス(選挙時65歳)の出馬は実現しなかつた。政府の意向を汲む憲法裁判所は、連続して大統領に再選された者(つまりモラレス)の立候補を違憲とする判断を発表した。また、2019年に導入された予備選挙制度を廃止する法律が2024年8月に議会で定められた。MASアルセ派と野党が協力して可決したもので、MASがモラレスを候補者として公認する機会を奪う狙いがあつた (Brújula)。さらに、立候補の手続きにあたり、選管はモラレス派が提出した書類を退け、アルセ派のものを正式な党文書として受理した。モラレスとその支持団体は繰り返し抗議行動を起こし、2025年3月には新党も発足させたが、再び選管は政党登録を認めなかつた。万策尽きたモラレスは今回の選挙を不当とし、有権者に無効票を投げるよう訴えた。

一部のMAS支持団体は上院議長であるアンドロニコ・ロドリゲス(36歳)を推した。ロドリゲスはモラレスの地盤であるコチャバンバの熱帯低地農民組合で活動する若手政治家である。モラレスの後継者として期待される一方、当のモラレスは経験不足を理由に立候補を支持しなかつた。結局ロドリゲスはMASを離れ、先住民知識人が代表を務める小規模な政党連合「人民同盟 (AP)」に所属して、そこから出馬した。

MASアルセ派は内務大臣のエドゥアルド・デル=カステイジョ(36歳)を擁立した。サンタクルス市出身の非先住民で、モラレス政権時は上院議会の職員であり、アルセと同様に支持基盤を持たない。モラレスはカステイジョの大臣登用に強く反対した。

非MAS系の候補者としては、右派の政党連合である自由連合 (Libre)のホルヘ・キロガと統一 (Unidad) のサムエル・ドリアが主要な候補者である。いずれも実業界

出身で、4回目の出馬という常連である。キロガはサンタクルス出身で、過去に暫定の大統領を務めたことがある。ドリアはラパスの出身で、先述のMIR政権で大臣を務めた経験を持つ。

今回当選したロドリゴ・パス(57歳)は政治家一族の出身である。父ハイメは先述のMIR政権の大統領、その叔父ビクトルはボリビア革命を主導し、大統領となったMNR党首である。ロドリゴもかつてはMIRに属し、地元の市長を経て、アルセ政権時には野党連合の上院議員であった。立候補にあたって所属したPDCは1954年結成の歴史ある党だが、近年は立候補を望む政治家を党員として一時的に受け入れるだけで、独自の政治活動は皆無である。

今回の選挙ではPDC副大統領候補のエドマン・ララ(39歳)がパス以上に注目を集めた。警察官であったララは警察内の汚職を次々と告発し、SNS上で知名度を急速に上げた。昨年免職に処されると、強硬な犯罪対策で知られるエルサルバドル大統領ナシブ・ブケレに触発され、犯罪撲滅を掲げる政治団体を結成した。パスは当初、別の人物を副大統領候補としていたが、その者がドリアを支持すると表明したため、急遽ララと協議し、出馬を取り付けた。

先述の左派=右派の基準で、選管に出された公約に従って5名を並べると、ロドリゲス・カステイジョ・パス・ドリア・キロガとなる。MAS系候補者は左派、ドリアとキロガは右派だが、パスは赤字の政府部門の再編を唱えつつ、部門全体の規模は維持するという左派的な提案をすると同時に、貿易を開放的にするという右派的な主張をしている。報道ではパスを左派とも(Flores)、右派とも称しているが(時事通信; ブラジル日報)、このばらつきは、パスが持つ左右双方の特徴の一部を各解説が取り上げ、強調した結果である。

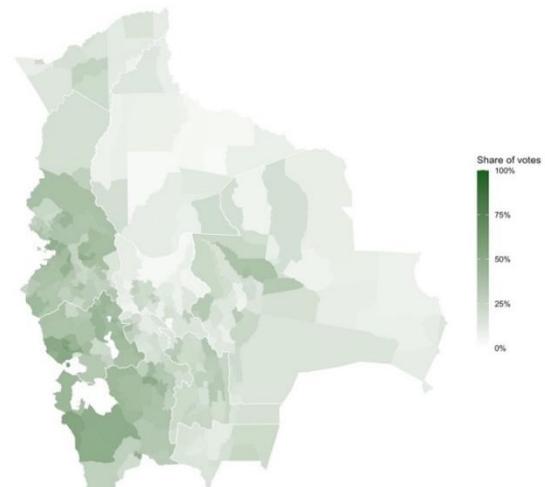
5. 8月の投票

世論調査における大統領候補者への支持は分散していた。候補者届出の締切前では首位ロドリゲスが支持率2

0%前後、それにドリアとキロガが15%前後で続き、締切後はドリアとキロガが首位を争い共に20%前後、ロドリゲスが10%前後で推移した。パスの支持は常に10%未満だった(Wikipedia)。ところが、8月の投票ではパスが有効投票数の32.1%、キロガが26.7%を得て決選投票に進み、ドリアは19.7%、ロドリゲスは8.5%、MASカステイジョは3.2%の得票で敗れた。さらに、無効票が全投票の19.9%を占め、例年の4倍程度に達した。

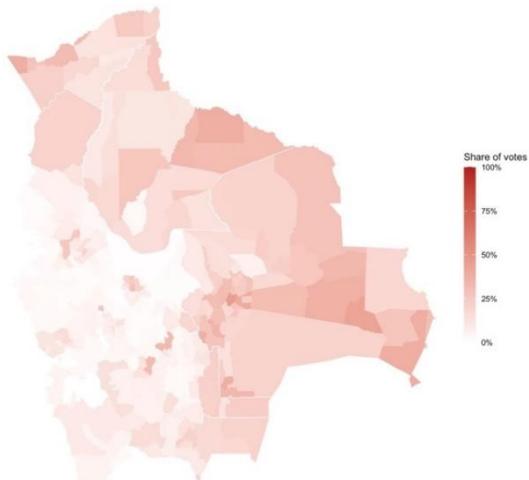
パスの躍進、そして無効票率の異常な高さは何を意味するのか。この投票は複数の選択肢から1つを選ぶものであり、有権者の積極的な選択が結果に反映される傾向にあることを念頭に置きつつ、結果を考察する。図1はパスの得票率を、図2はキロガの得票率を市別に示した地図である。パスは高地部の農村、キロガは低地部と都市で比較的支持が厚いことがわかる。例外は中央に位置するコチャバンバ県農村部であり、双方の地図で色が薄い。

図1 2025年8月パス(PDC)市別得票率



(出所)OEP, OCHAより筆者作成。

図2 2025年8月キロガ(Libre)市別得票率

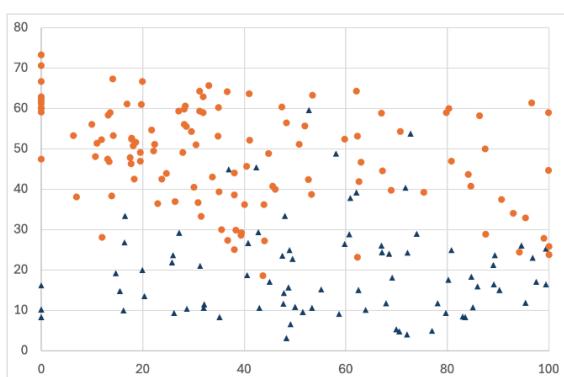


(出所)OEP, OCHAより筆者作成。

パスの支持傾向をより明確に示すため、都市人口比率が判明している199の市について、同比率とパスの得票率の散布図を作成すると図3の通りとなる。農村であるほど得票率が高いなら、点は右下がりに分布するが、その傾向は乏しい。これに対し、各市を表す点を高地部(橙)と低地部(青)で色分けすると、高地が上に、低地が下に集中している。パスの支持を説明する軸としては、都市＝農村より高地＝低地が適切と言えそうである。

図3 パス(PDC)市別得票率

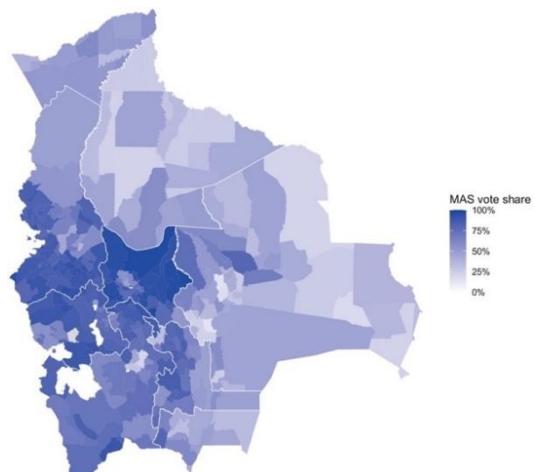
(横軸:都市人口比率、縦軸:得票率(%)



(注)N=199(都市人口比率が判明している市)。橙は高地部(ラパス、オルロ、ポドシ、コチャバンバ県)、青は低地部(サンタクルス、ベニ、パンド、タリハ県)の市である。(出所)INE, OEPより筆者作成。

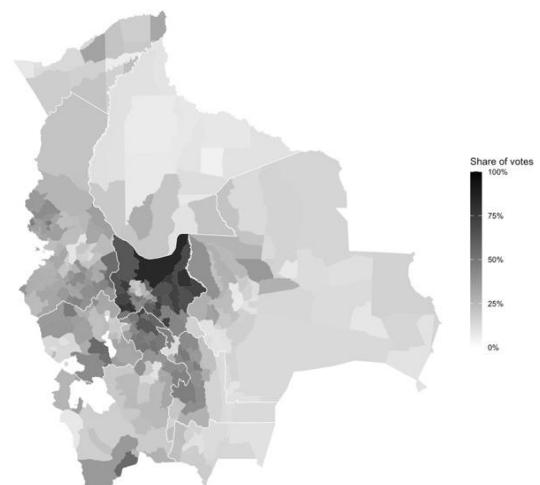
MASの分裂に伴い、従来MASを支持してきた有権者が政治的位置の近いパスを支持した可能性が指摘されている(Peralta)。図4は、アルセが当選した2020年大統領選挙におけるMASの市別得票率である。MASの支持分布は地理的に安定していること(岡田＝大沼2021)、そして図1と図4が似ていることから、この指摘は妥当に見える。しかし、今回の選挙の無効票率(図5)の分布も同様であり、MAS支持者が積極的に無効票を投じた可能性もある。実際、モラレスの地盤であるコチャバンバ県農村部の無効票率は顕著に高い。

図4 アルセ(MAS)2020年市別得票率(%)



(出所)OEP, OCHAより筆者作成。

図5 2025年8月大統領選市別無効票率(%)

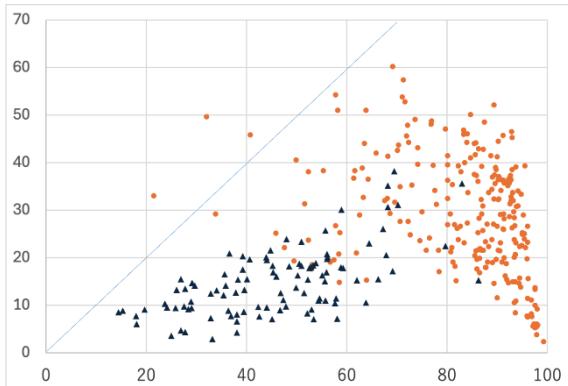


(出所)OEP, OCHAより筆者作成。

図6は2020年にアルセ=MASが得た得票率を横軸に、2025年8月にパス=PDCが得た投票率を縦軸に設定した散布図である。過去にアルセに投票した者が今回パスに投票したなら、図内の45度線上に点が並ぶが、実際にはほぼ全ての点が線の右側にある。つまり、パスは過去のMASと同等の支持を得ていない。さらに、「へ」の字状をした点の分布のうち、右上がりの部分は低地部の市が大半を占め、MASの支持が高い市ほどパスに投票した傾向がある。一方、右下がりの部分には高地の市が集中し、MASの支持が高い市ほどパスに投票していない。

図6 大統領選挙得票率

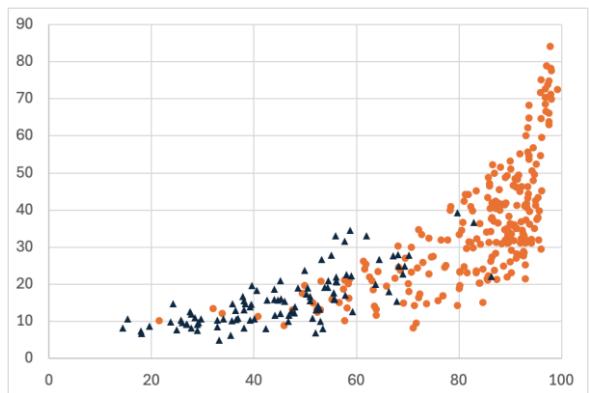
(横軸:2020年アルセ(MAS)、縦軸:2025年選挙パス(PDC))



(注)N=336(2020年以後に分割された市を除く)。橙は高地部(ラパス、オルロ、ボトシ、コチャバンバ県)、青は低地部(サンタクルス、ベニ、パンド、タリハ県)の市である。(出所)OEPより筆者作成。

図7は図6の縦軸を今回の無効票率に入れ替えた散布図である。高地か低地かを問わず、2020年にMASに多く入れた市ほど、今回は無効票を投じたことがわかる。しかも、勾配は高地の市ほど急であり、積極的に無効票を投じた傾向が見て取れる。

図7 大統領選挙得票率
(横軸:2020年アルセ(MAS)、縦軸:2025年無効票)



(注)N=336(2020年以後に分割された市を除く)。橙は高地部(ラパス、オルロ、ボトシ、コチャバンバ県)、青は低地部(サンタクルス、ベニ、パンド、タリハ県)の市である。横軸は有効投票数、縦軸は総投票数に対する比率である。(出所)OEPより筆者作成。

以上より、確かにMASを従来支持してきた有権者の一部はパスに投票したと思われるが、むしろ無効票への積極的な投票が目立ったことが指摘できる。この傾向は特に高地部で顕著であった。結果として、パスはモラレスやアルセのように一度で勝利を決められず、決選投票に進んだ。

大統領選挙と同時に行われた議会選挙の結果は表1の通りである。MASはわずか下院2議席を得るにとどまった。大統領選挙の決選投票に進んだパスのPDCとキロガのLibreは、いずれも単独で過半数を取ることができなかった。大統領がどちらになるにせよ、議会運営のために他党と連立を組まねばならないことがこれで確実となつた。

表1 議会選挙結果(定数:上院36、下院130)

	上院	下院
PDC	16	49
Libre	12	39
Unidad	7	26
AP	0	8
Súmate	1	5
MAS	0	2
Yuqui	0	1

(注)Súmate: ポリビアのための自治(APB-Súmate)(代表マンフレド・レイエス、現コチャバンバ市長)、Yuqui: ユキ・ビア=レクアテ先住民委員会(Consejo Indígena Yuqui Bia Recuate)(先住民ユキとユラカレが組織したコチャバンバ県熱帯低地部を拠点とする団

体)。(出所)OEPより筆者作成。

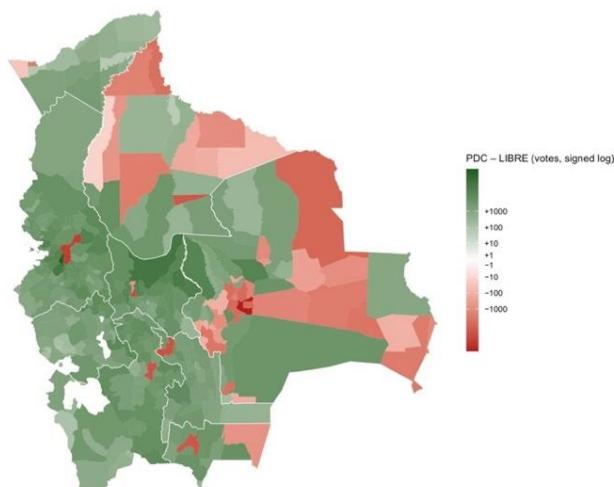
図9 決選投票無効票率 (%)

6. 10月の決選投票

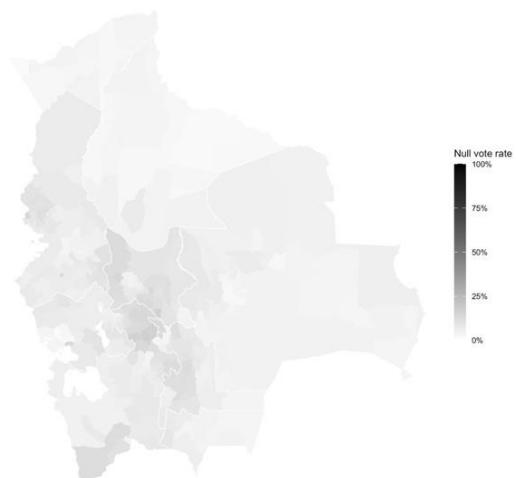
決選投票前の複数の世論調査では、キロガの支持が40%台前半、パスが30%台後半で推移した。支持者未定の回答も常に10%弱あったものの(Wikipedia)、キロガが有利とされた。ところが、実際の投票の結果、パスが有効投票数の55%を獲得し、再び予想を覆す勝利を収めた。また、全投票に対する無効票の比率は4.7%にまで下がった。

図8は両候補者の得票差を、図9は無効票の比率を市別に表示した地図である。8月と同様に高地部でパスの優勢が目立つことから、これを勝因とする解釈もあるが(Atahuichi)、むしろ注意すべき点は、高地か低地かを問わずキロガが都市部でパスに大量の得票差をつけた一方、キロガが強いはずの低地でパスの優勢が目立つことにある。最北にあるパンド県はその典型で、都市人口比率が高い2つの市を除き、パスがキロガをリードした。また、8月に多数の無効票が発生したコチャバンバ県農村部でも全市でパスが勝利した。

図8 決選投票得票差(緑:パス、赤:キロガ)



(出所)OEP, OCHAより筆者作成。



(出所)OEP, OCHAより筆者作成。

この結果をもたらした原因は未だ明確ではない。パスを後押しした確実な要素としては、8月の投票で20%弱の票を得た三番手のドリア (La Razón)、そして一部の農民組合がパスへの支持を表明したことである (La Patria)。また、二者択一の決選投票では、どちらの候補者を積極的に推すかだけでなく、積極的に避けるかという判断も重要になるが、今回は新自由主義色の強いキロガを有権者が忌避したという評価が多い (Exeni; Hendrix)。自身のキャリアを賭けて汚職を告発した副大統領候補であるララへの共感が重要だったとする説も目立つ (Glatzky; Tórrez)。キロガに対する反エリート感情を強調する説もあるが (Saldías; Velasco-Guachalla and Hammel)、パスもいわゆるエリートであることを考えると (Ticona a)、これは説得力を欠く。PDCの公約の持つ高い専門性が評価されたという説に対しては (Hendrix)、むしろ粗雑であるとの評価もある (Red Uno)。

感想の域を出ないが、筆者は2つの点が影響していると見ている。第一に、公約の出来については、都市部におけるキロガの人気にこそ貢献していると思われる。筆者と連絡を取っている都市在住者や彼らに連なる人脈のSSIにおける発信を見る限り、キロガ=Libreの主張には過去に出馬した大統領選挙の時から一貫性があるが、パス=PDCの公約は急造で、曖昧であるとの意見が目立

つ。公約の中身を支持するかは別として、筆者も同様の印象を持っている。第二に、8月の投票に先立ちパスは注目度の薄い候補者であったことを踏まえると、パスが決選投票に進んだことそれ自体に強い宣伝効果があり、低地農村部を中心にキロガよりもパスに近さを感じた有権者が増えたものと予想している。

7. 義務投票制度に関する報道

日本の報道でボリビアが扱われることは珍しいが、今回の選挙に関しては大手新聞社やテレビ局がその結果を伝え、インターネット上でも多くの日本語記事が流通した。興味深いのは、その一部がボリビアの義務投票を扱ったことである。日本経済新聞は9月13日にボリビアを含む南米諸国の義務投票を特集し、国民の声を拾い上げようとする努力が制度に結実したと報じた(日本経済新聞 a)。また、TBSは10月22日に決選投票の結果を報じた際、ボリビアでは先住民や女性が選挙権を持たず、苦しい生活を強いられる中、流血の末に革命を遂げ、普通選挙権が実現したことに義務投票の起源を求めた(TBS)。

これらの報道には、日本における政治への無力感を背景に、政治的関心を喚起したい狙いがあると思われる。筆者はこの試みに強く共感するが、義務投票を導入する説明としては難があると見ている。国民の声を拾い上げようとしたのは誰か、そして普通選挙権の実現がなぜ義務投票につながるのかが明確でないからである。

義務投票に関する学術研究では、制度にはそれを定めた者の利益が反映されるという政治学の基本的発想に基づいて、その成立を説明する。すなわち、投票に行かぬ人々に投票させることが与党政治家の当選につながることに、義務投票を導入する動機があると考える(Birch 2009)。ボリビアの場合も同様で、1952年の革命後に普通選挙権と合わせて義務投票制が導入されたのは、革命で政権を奪取したMNRが後に実施される選挙において、農民や労働者など革命で利益を得た有権者の票を確保するためと考えることができる。

8. 内政の展開

当選を決めたパスは大統領就任前から活発に動き、政権発足に向けた準備を進めた。当選後には燃料供給・外貨確保・政府組織再編・議会での協調という4つの柱を掲げ、協力者となる政治アクターとの交渉を進めた。議会を除く3つの柱については、財政再建のための融資を求めて国際通貨基金(IMF)やアンデス開発公社(CAF)など国際金融機関を訪ね、MAS政権が敵対した米国政府との関係修復を図る一方、国内では企業家層との対話を重ねた。議会対策については、ドリアのUnidadと連立を組み、閣僚の一部や議会両院における委員会の委員長職をUnidadに提供することで、政権運営の安定を確保した。Unidadからは新自由主義を支持するエコノミストか閣僚や補佐に入っており、選挙戦で政治的位置の不明瞭だったパス政権が右派に舵を切りつつあることがうかがえる。

自国経済を外国に開放し、福祉を抑える新自由主義は有権者の反発を招きがちであるが、現在のパス政権にはそれを断行できる理由がある。先述の4つの柱には含まれていないが、選挙戦以来の重要な論点として、ララが強く主張する汚職対策がある。現在、MAS政権時の汚職を政府が次々と告発しており、前大統領アルセも多額に上る不正な公金支出に絡んだ疑いで身柄を拘束されている。MAS政権が経済を悪化させ、国庫も底を尽しているとパスはマスコミに繰り返し語り、不人気政策が自身の責任でないことを強調している。

こうした動きの背後で、政治のテーマから静かに外されつつあるのが民族多様性である。PDCは先住民に対して非常に関心が薄い。選挙時の公約では、天然資源開発において生活を脅かされる可能性のある先住民に事前同意を取るという環境問題の関連でのみ、先住民への言及がある(OEP)。また、MAS政権では必ず先住民の閣僚が登用されたが、パス政権に先住民の閣僚は存在しない。パス政権の言動はMAS政権以前の時代に逆戻りしてしまったという批判が出ているが(Ticona b)、これは正鵠を射ている。

今後の政治運営には大きく二つの課題が立ちはだかる。第一に、MASの悪政を理由にした新自由主義政策の推進がいつまで通用するかという問題がある。深刻な物価高を早急に解決し、景気を浮揚させなければ、不調の責任を与党に求める声が出ることは不可避である。

第二に、与党PDCの安定性をいかに確保するかという問題がある。安定には党内の結束と党外への支持拡大が必要だが、双方に問題がある。まず、現在の党を組織的に支えているのはパスとララが各自持つ個人団体に限られる。一方、ララは国際金融機関の融資やUnidadに偏る組織などに関しパスを公然と批判し、政策の調整なく副大統領候補を選んだ影響が露呈している。ララは自身の政治団体を政党登録するとも表明しており、与党の組織的一体性が一層乱れる恐れもある。党外においては、MASの分裂によって政治とのつながりが再び不透明になった農民組合など、市民団体との関係を開拓する可能性が開けているが (Velasco-Guachalla and Hu mmel)、パスやララはこうした基盤強化に積極的な動きを示していない。

来年3月には地方選挙が予定されている。PDCやLibreなど2025年選挙の主要政党に加え、MIR、モラレスの新党、さらにはララの政党が参加する可能性があり、未だ流動的な政界の再編に一つの方向性を示す契機となることが予想される。

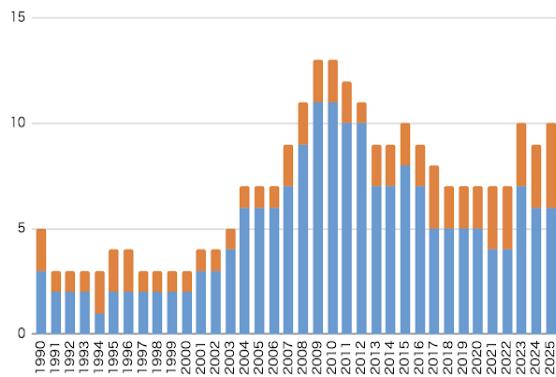
9. 左派幻滅論の諸問題

最後に、MASが下野したことについて、これをボリビア有権者の左派に対する幻滅と解釈する議論がある (BBC; Thompson)。また、大統領選挙を控える他のラテンアメリカ諸国でも左派が劣勢にあることから、南米やラテンアメリカ全体で有権者が左派を見限り始めたとし、これを21世紀初頭に始まる左傾化の終焉 (安田; Oppenheimer)、あるいは左傾化の再来として2020年ごろに高まった左派支持に有権者が疲れた表れであるとしている (日本経済新聞 b)。

以上の議論には問題がある。第一に、左派政権の増減

に対する認識は根拠を欠く。図10はラテンアメリカ20か国における左派政権数の推移である。冒頭で述べた通り、左傾化はアジア通貨危機に伴う不況により、新自由主義を推進する政府への批判が起き、ラテンアメリカ各国の選挙で続々と左派が勝利したことを意味する。左派政権数は2000年から10年もの期間をかけて、3から13へ増加した。その後は資源・農産品の国際価格の下落や新型コロナウイルスの影響で不況が長引き、左派か右派かを問わず与党が選挙で苦戦し、各国の選挙の周期に応じて左右の政権交代が生じている (宮地 2020)。2013年以後は、左派政権数は8の周囲を小さく振動し、2023年に10に達したものの、2026年には8への減少が予想される³。つまり、左傾化は今年終わったのではなく、10年前に既に終わっており、2020年以後の左派政権増加を左傾化の再来とすることは、左傾化終了後的小幅な動きを誇大に扱っている。

図10 ラテンアメリカ20か国における左派政権数
1990-2025(年初時点)



(注) 橙は専制、青は民主制を示す。(出所)宮地b。

第二に、幻滅や疲れの意味が不明確である上に、ボリビアの事例ではいかなる意味で解釈してもその根拠がない。まず、幻滅とは有権者が左派のイデオロギーに失望した、つまり左派を信じていたのに信じられなくなったことを意味すると解釈できる。代表的な世論調査であるラティノバロメトロ (Latinobarómetro) は、自身の政治的位置を0から10までの11段階(0が極左、5が中道、10が

極右)で回答する質問を定期的に設定している。ボリビアで極左(0)と回答した者は2018年から9%前後、左派(0から3まで)の合計も20%前後で推移しており⁴、アルセ政権成立以前から選挙前までの間、左派に対する期待に大きな変化はない。

幻滅とは左派イデオロギーではなく、左派政権に対するものだと解釈したとしても、正当化は苦しい。選挙とは、出馬した政党の中から有権者が最良のものを選ぶという需要と供給の上に成り立つのであり、結果は需要すなわち有権者だけでは決まらない。そして、これまで説明してきた通り、ボリビアにおけるMAS敗北の直接的要因はMASの分裂すなわち供給側にある。かつてのMASのよう、左派を代表する確たる政党が出馬した上で敗北を喫したなら、それは左派への幻滅を意味しうるが、そうした左派政党が不在である今回の選挙では、有権者が積極的に左派政党を否定したことを検証することができない。

政治家や政党の支持の度合いを表す選挙結果は、外貨準備高のような指標とは異なり、一見して分かりやすい情報である。それゆえに、選挙結果を時系列や複数国に広げ、その中に一定の傾向を安易に見出してしまう恐れがある。これに陥らないようにするには、数字の意味や経緯を多面的に考える必要があり、今回のボリビアの選挙についても同様である。

※本稿は日本ボリビア協会が2025年11月24日に開催したオンラインイベント「南米ボリビア政治のこれまでとこれから：大統領・議会選挙を終えて」の内容に、情報を追記したものである。

参考資料

(ウェブサイトは全て2025年12月18日にアクセス確認済み)

(日本語)

岡田勇=大沼宏平 2021.「ボリビア2019～20年選挙の対立構造とポスト・モラレスMAS政権の誕生」『ラテン・ア

メリカレポート』38(1).

時事通信 2025.「右派2氏が決選投票進出 反米左派退潮、政権交代へ—ボリビア大統領選」8月18日.

日本経済新聞 2025a.「南米支える「投票必須」社会」

9月13日.

——. 2025b.「南米で広がる左派疲れ」10月21日.

ブラジル日報 2025「ボリビア大統領選で右派当選=20年続くモラレス時代に幕」10月21日.

<https://brasilnippou.com/ja/articles/251021-41mangekyou>

宮地隆廣 2022.「『ピンクタイド』は今どこへ 2000年代ラテンアメリカの政治潮流」『中央公論』10月号.

——. 2025a.「多民族国に向けての政治」大島正裕編『ボリビアを知るための65章』明石書店.

——. 2025b.「図12-2 左派政権数の推移(2025年1月1日時点)」『世界の中のラテンアメリカ政治』ウェブサイト, 3月14日.

<https://lapitw-tufs.blogspot.com/2025/03/12-2202511.html>

安田佐和子. 2025.「トランプ大統領の発言とアクション(10月16日～23日):南米で本格化する「モンロー・ドクトリン2.0」、麻薬ボート攻撃の本当の狙いは?」『フォーサイト』(新潮社)10月25日.

TBS. 2025.「投票はお祭り」南米・ボリビア「義務投票」の選挙って?車の走行禁止・飲酒禁止・罰金罰則など“3つのルール”も…有権者(81)投票は「望みを伝える機会」【news23】| TBS NEWS DIG】10月23日.

(英語・スペイン語)

Anria, S. 2018. *When Movements Become Parties: The Bolivian MAS in Comparative Perspective*. Cambridge University Press.

Atahuichi, R. 2025. “La Biblia y crucifijo, las primeras señales.” *La Razón*, 5 de noviembre.

BBC (British Broadcasting Cooperation). 2025. “3 claves para entender por qué la izquierda perdió en Bolivia tras casi 20 años en el poder.” 18 de agosto, <https://www.bbc.com/mundo/articles/c30z12lqegno>.

Brújula. 2025. “En medio de empujones e insultos, la Cámara de Diputados aprueba proyecto de ley para suspender primarias.” 1 de agosto.

BCB. (Banco Central de Bolivia) Website. <https://www.bcb.gob.bo/>

Birch, S. 2009. *Full Participation: A Comparative Study of Compulsory Voting*. Manchester University Press.

Bustillos, J. 2025a. “Luis Arce: Salgo por la puerta grande.” *La Razón*, 27 de octubre.

———. 2025b. “Arce: Evo rompió su palabra (II).” *La Razón*, 10 de noviembre.

———. 2025c. “Arce: Por culpa de Evo, ganó la derecha (III).” *La Razón*, 24 de noviembre.

Exeni, J. L. 2025. “Malmenorismo y fracasada transada.” *La Razón*, 2 de noviembre.

Flores, F. 2025. “Bolivia: The challenges facing Rodrigo Paz’s incoming government.” *Latinoamérica21*, October 21. <https://latinoamerica21.com/en/bolivia-the-challenges-facing-rodrigo-pazs-incoming-government/>.

Glatsky, G. 2025. “Rodrigo Paz, a centrist, ends 20 years of leftist rule in Bolivia.” *New York Times*, October 20. <https://www.nytimes.com/2025/10/19/world/americas/bolivia-presidential-runoff-election.html>

Hendrix, S. 2025. Comment in “What will Rodrigo Paz’ s victory mean for Bolivia?” The Dialogue (Inter-American Dialogue) website. <https://thedialogue.org/analysis/roundtable-with-bolivian-presidential-candidate-rodrigo-paz>

La Patria. 2025. “Paz y Lara reciben apoyo de grupos de campesinos en La Paz.” 11 de septiembre.

La Razón. 2025. “Doria Medina acepta su derrota y compromete su apoyo a Rodrigo Paz en la segunda vuelta.” 17 de agosto.

LAPOP (Latin America Public Opinion Project). AmericasBarometer Data Playground. <https://www.vanderbilt.edu/lapop/data-playground-eng.php>

Latinobarómetro. Latinobarómetro online. <https://www.latinobarometro.org/odajds/OCHA>. (United Nations Office for the Coordination of Humanitarian Affairs).

Humanitarian Data Exchange. <https://data.humdata.org/>

OEP. (Órgano Electoral Plurinacional) “Elecciones Generales 2025.” <https://www.oep.org.bo/elecciones-generales-2025/nacional-2025/>

Oppenheimer, A. 2025. “Latin America’s right turn: A windfall for Trump?” *Miami Herald*, October 8.

Paz, R. 2025. Primer discurso, 8 de noviembre. <https://www.youtube.com/watch?v=F90LSMCFVZw>

Peralta, J. O. 2025. “Black swans in Bolivia.” *Latinoamérica21*, September 3.

Red Uno. 2025. “Analistas coinciden en que Rodrigo Paz tiene ideas y propuestas, pero

sin planes claros para ejecutarlas.” 13 de julio.

Saldías, N. 2025. Comment in “What will Rodrigo Paz’s victory mean for Bolivia?” The Dialogue (Inter-American Dialogue) website.

Thompson, S. 2025. “En Bolivia no ganó la derecha. Se desgastó el proyecto de izquierda por la pugna entre sus líderes.” Tercera Dosis, 21 de agosto. <https://terceradosis.cl/2025/08/21/sinclair-thomson-especialista-en-historia-y-politica-boliviana-en-bolivia-no-gano-la-derecha-se-desgasto-el-proyecto-de-izquierda-por-la-pugna-entre-sus-lideres/>

Ticona, E. 2025a. “Dinastías políticas, cuasi monárquicas en la política colonial

boliviana.” *La Razón*, 2 de noviembre.

———. 2025b. “Los discursos de retorno del neoliberalismo.” *La Razón*, 16 de noviembre.

Tórrez, Y. 2025. “Espejo de evistas y Lara.” *La Razón*, 1 de diciembre.

Velasco-Guachalla, X., and C. Hummel. 2025. “Why Bolivia voted for change, and continuity.” *Journal of Democracy* website, October. <https://www.journalofdemocracy.org/online-exclusive/why-bolivia-voted-for-change-and-continuity/>

Wikipedia. “2025 Bolivian general election.” https://en.wikipedia.org/wiki/2025_Bolivian_general_election

¹この節の記述は宮地aに依拠する。

²この節の記述は引用が明示されている部分を除き、BCBと宮地aに基づく。

³本稿執筆時点で左派から非左派への政権交代はボリビアとチリで実現し、ホンジュラスでも実現の見込みである。逆に、非左派から左派への交代はウルグアイで実現した。

⁴パスもまた自身の勝利の原因として、有権者が左派イデオロ

ギーに幻滅したことを指摘しているが (Oppenheimer; Paz)、これは彼の印象の域を出ないということになる。なお、左派を自認する有権者の水準はモラレス政権期よりも2018年以後の方が高く、幻滅とは逆の傾向にあるとすら言えることを付言しておく。ラティノパロメトロと双璧をなす世論調査であるラテンアメリカ世論プロジェクト(LAPOP)でも、データ数は少ないものの、同様の傾向が見られる。

3. ボリビア画家列伝[2]

—Maclovio Marconi H.—

作家・ジャーナリスト
風樹 茂

写真3-1 黒鷺の死

オルーロへ

1988年の春先、私はラパス、コチャバンバ、スクレ、ポトシなどの高地をバスを乗り継いで巡っていた。時折、山間の隘路ですれ違いざまにバスが対向車と側面をこすり合い肝を冷やす。谷底には車の残骸が見える。22年後にウンガスの谷底を目指して走った通行禁止の隘路では、もっと多くの残骸を見ることができた。ボリビアのバス旅は、他者の苛烈な運命の変転を弔い、知っている限りの神を道祖神に見立てて祈る行程である。

旅の目的は美術館、文化会館巡りだった。低地のサンタクルス州に居住していた私には、冷たい澄んだ空気と先住民の文化は新鮮だった。今回の目的地はオルーロである。ラパス～オルーロ間は250キロほど。バスに揺られている私の心に響いているのは、低地で聴いていたオルーロのカーニバルの悲哀を込めたしかし胸が高鳴るメロディーだった。カーニバルというリオ・デ・ジャネイロと一般には思われかねだが、同じ時期に世界中のカトリックの国々でも祭りが催される。私は留学中のメキシコのベラクルスのカーニバルにメキシコ人の友人や留学生仲間といっしょに浴衣姿で練り歩き、喝采を浴びた覚えがある。

オルーロのカーニバルは南米3大祭りのひとつで盛大なものである。仰々しい仮面をつけて踊る「Diablada」や「Morenada」といわれる踊りが想起される。前者は善と悪の戦いを象徴し、後者は社会や歴史を風刺する踊りで、リオのカーニバルはアフリカ文化の下地にポルトガルの文化を鏤め、オルーロのものはインディオ文化にスペインの風味をふりかけたものであろうなどと想像していたが、今回調べてみるとDiabladaはオルーロあるいはチチカカ湖のプーノあたりが起源とされるが、一方Morenadaは奴隸として送り込まれた黒人文化が元だというが主流の学説らしい。その仮面が黒く塗られ、唇がやけに強調されることから、なるほどと思わせる(「La Historia de la Morenada」by Milton Eyzaguirre Morales (Antropologo/Museologo) YouTube・Bolivia TV oficial・2024/02/13)。

スペイン人はポトシの銀山で使役するためにアフリカからの奴隸を導入したが、彼らは高地に適さず、低地のタリファの葡萄栽培やウンガスの農産物やコカの栽培に利用された。現在ボリビアの黒人人口は1%未満なのでめったに彼ら彼らの末裔を目にすることはない。居住地は温暖なウンガス地方に集中している。

鉱山街のオルーロ

オルーロは茶褐色の街だった。家々は土色で、歩くと砂埃が舞う。標高は3700m。日差しが強い。鉱山街特有の悲哀を孕んだ風が吹いている。資源に恵まれた土地は天国と地獄を上下するのは、日本を含め世界中の歴史である。

ここは錫男爵と呼ばれるシモン・パティニョ(Simón Iturri Patiño, 1862年6月1日 - 1947年4月20日)が財をなした街である。世界五大富豪の一人。1925年の時点で、推定で約5億ドル(現在の価値にして6兆2560億円)の資産を持っていたとされる。

パティニョはコチャバンバ生まれだが、1894年にオルーロのワヌニ鉱山で錫の大鉱脈を当て、ヨーロッパの錫精錬業も支配する財閥を築き上げた。だが彼はオルーロに長くは住まなかった。1924年に心臓発作を起こした

のである。医者の勧めもあって高地の本国は避け、パリ、ロンドン、ブエノスアイレスなどの空気が濃い低地に居住するようになった。また事業展開は先進国が中心なので、ボリビアにいるよりも仕事の面からも都合がよかつた。不在資本家として、左翼的な言葉を使えば鉱山労働者の血を吸って収益を上げていたといえる。

第二次世界大戦後は、鉱区の鉱床品質(含有率)が低下し、地下資源の常として一過性の栄華で終わってしまったに見えた。彼の死後、1952年のボリビア革命で鉱山は国有化される。パティニョはブエノスアイレスで最後を迎えていた。

なお、ワヌニ鉱山ではまだ錫が採掘されているという。技術改良とインフラ整備を通じてより深部での採掘が可能となり、いまもボリビアの錫鉱山である。

あまりに政治的な

私が訪れたのは、文化会館だった。もともとはSimón I. Patiñoの旧邸宅である。当時、ボリビア経済は2万パーセントといわれるハイパーインフレがやっと治まった病み上がりの状況にあり、オルエーロの会館はまるで破産して競売にかけられているような荒廃した様相を呈していた。絵画があちらこちらに乱雑に置かれ、壁には亀裂が走り、天井はネズミが走っても不思議ではない雰囲気を漂わせていた。途上国の地方の博物館や美術館は予算不足で廃館となっているものも多いので、存在しているだけまだしなのかもしれない。2022年に立ち寄ったスリランカの寺院でもガンダーラの像やら仏像やらの歴史的工芸品が乱雑に放置されていたものだ。

けれども他者をあげつらうのは正当ではあるまい。実は私の家の中二階の倉庫は途上国の地方美術館化しており、ボリビア中心に海外で収集した美術品がゴキブリやネズミにかじられる危険に晒されながら、でたらめに陳列され、長年宝の持ち腐れなのである。

私に対応してくれたのは館長のMaclovioだった。薄茶色のさくられた壁と同じ色の作業着のようなものを着ている。年齢は不詳。館長なのだからそれなりに年がいっているものと推測した。

前回の60号ではとrを間違えてMacrovioと記載している。間違いである。残念ながら私は外国語のとrの発音はいつになく聞き分けられない。この場を借りて本人と読者の方に謝罪します。(それでも他の言語と比べてスペイン語は日本語と同じく言語の末尾が母音で終わる開音節の言語なので、lとrを除けば他の発音を判別できないことはめったにない。日本人には都合のよい外国语である)

私が来訪の目的を説明すると、彼は自作の絵画を売り込み始めた。どれもこれもが労働者、とりわけ銃を手にした鉱山労働者の武力革命を扱ったものだ。一見して1917年のロシア革命の影響が見て取れた。キャンバスではなくベニヤ板や麻に描いているものもある。素人画家だったアンリルソーや貧乏画家のゴーギャンを思い出した。

「左翼革命を信じているのですか」と私は聞いた。彼はそうだと頷いた。

時、1988年。共産主義のソ連邦は経済的に崩壊の危機にあった。ゴルバチョフ書記長が進めるペレストロイカ(改革)とグラスノスチ(情報公開)によって、危機を乗り越えようと必死だったが、努力虚しく89年にはベルリンの壁が崩壊する。

革命？ 何やら時代錯誤

ボリビアではハイパーインフレを克服するために、世銀・IMF主導の新自由主義による構造調整が行われていた。民営化、緊縮財政、税制の見直し(付加価値税導入)、価格統制の撤廃、金利自由化、通貨切り下げ(百万分の一のデノミ=百万ペソを一ボリビアノスとして新通貨発行。一ドルを一・九二ボリビアノスと定めた)、均一関税の採用と非関税障壁の撤廃等など…。私の職場でも年末に労働者が領収書をたばこして経理部門に持参していたのを覚えている。収入に応じて払い過ぎの付加価値税は還付されたのである。そして、このショック療法はインフレ退治には役立ったように見えた。



写真3-2 この時代に革命？

これらのショック療法で最も影響を受けたのは、鉱山公社(COMIBOL)の労働者だった。2万人以上が余剰労働者として解雇された。それに対する激しい抗議運動がラパス他の高地で起こり、政府は戦車を繰り出し武力で押さえつけた。もともとCOMIBOLはボリビア革命(1952年)のときに国営化された鉱山が基盤となってできた組織だった。シモン・ペティーニョ所有だった鉱山も例外ではない。オルーロの画家が革命を題材として描く必然性がある。

けれども、その時の私には世界の潮流からは離れてしまっていると感じた。しかもこのような政治や革命をモチーフとした絵を欲する人はボリビアでもましてや日本にはいまい。食卓の壁に飾る種類のものではない。

私は気乗り薄で彼の提示する絵を見ていたが、冒頭の「黒鷲の死」が提示されたとき一機こ心が激しく揺さぶられ、思わず身を乗り出した。後日、David Angelesが「これはすごいな」と呟き画家としてライバル心を燃やした作品が出てきたのである。

戦争や反戦の絵画は世に幾多とあるに違いない。最も著名なのはピカソのゲルニカだろう。けれどもキュビズムの技法なので、もうひとつ絵空事のように感じてしまう。一方この絵からは凄まじい情念が伝わってくる。政治的ポスターのような絵とは質が全く違う。作者の果たせぬ

願望と情念が、先住民の狩人と黒鷲を創造し、新たな寓話的な世界を作り出したように見える。モチーフは説明する必要もないだろう。

私は売れる売れないと関わらず、是が非でも手にいれたくなった。そこで他にその作品に付随するものとして2点を追加して購入した。ひとつは缶を拾うホームレスのような母子がライオンに怯える絵と、ボリビアが後を追うこと暗示するロシア革命を描いた作品である。いずれも無題だった。この3点あればMaclovioが何を描きたいのかが十分伝わってくると考えたのである。



写真3-3 母子と獅子は何の象徴だろうか？

彼は自分の作品を手放すときになって初めて、絵画の隅に自分の名前を白いペイントで記載した。



写真3-4 自作とおさらば。署名するMaclovio

37年後 鮎る作品

本稿を書くにあたって、もう一度Maclovioの作品と向き合ってみた。当時、時代遅れではないかと思っていた作品は、今という潮流に生気を吹き込まれ、以前よりも生き生きとした光を放っていた。歴史は韻を踏む(マーク・トウェイン)といわれるが、まさに大国が潤滑税を武器に棍棒外交を展開している現状では、世界の多くの人々に迎えられる待望の作品となっているのではなかろうか。

さらにMaclovioにかかる情報を集めてみた。生きているかどうかと疑っていたが、彼は存命だった。本名は、Maclovio Marconi Humérez、オルロ工科大学(UTO:Universidad Técnica de Oruro)の建築関連の学部を卒業している。現在もMuseo Simón I. Patiñoの館長でUTO文化振興部門の責任者だった。さらに、オルロ、ラパスなどで展覧会を開いている。いくつかの新聞記事にあたると、彼は画家としても活動しているが、政治的なテーマであるため、展覧会の頻度は制限され、また積極的に絵を販売するわけでもないとわかる。

コチャバンバの4人展では「Opinion」紙(7月20日 2021年)に、反逆の絵画とうたわれ、インタビューに対してマクロビオは「我々の社会のもっとも貧困層の要求を表現するようにしています。我が国は街路での大衆行動を絶え間なく行っている国ですから」と答えている。

彼の芸術家としてのありようが、端的に説明されているのは、「Arte, Pintura, Cultura, Teatro」なるデジタルサイト(2013年6月1日(土曜日))版のインタビュー記事である。

<https://artepinturacultura.blogspot.com/2013/06/maclovio-marconi-plasma-en-sus-obras.html> 見出しは、「大衆の要求を表現するMaclovio Marconi」要約してみると以下の通り。

多くの美術家は自然、風景、人間の身体の美しさなどからインスピレーションを得ているが、芸術を通じて大衆の願望を表現することも可能だ。Maclovio Marconiは大衆の社会的な要求や願望からインスピレーションを得ている。彼は次のように述べている。「私の作品には多く

の思想が込められており、ほとんどが政治的・思想的なメッセージを持っています。私とそのグループは民衆と連帯し、彼らの社会的な希望と要求に少しでも貢献し、それに共感する作品を作ろうとしています」

Maclovioの絵画の才能の開花

Maclovioは幼少のころから絵の才能を開花させ、美術学校に通い、15歳で終了。最初の展覧会は1974年、オルロ工科大学(UTO)の学長室展示ホールで開催された。UTOで大学生として建築を学んでいたときには頻繁にクーデターが起こるという政治情勢の中、抗議をテーマにしたポスターや壁画を制作し、かつ絵画コンテストに参加してきた。

「当時政治的な動きが活発だったので、現在に至るまでの作品のテーマは社会的な内容とイデオロギー的なメッセージを扱っています。これが、私たちのグループが美術界に深く関わらない理由の一つです。なぜなら、美術を享受する人は少数派ですし、私の作品が経済構造の問題に焦点を当てているので、一般的な展覧会には参加できません。」

さらに彼はこう付け加えた。「私は作品を購入してもらうことを目的していたのではなく、特定の目的に役立つことを目指していました。社会的に貢献できれば満足なのです。現在は行政的な職場に在籍しているものの、UTOで開催される全国美術家会議で発表する3つの作品を準備したと語った。

インタビューでは使用する絵画の技術について、油絵、水彩画、デッサン。また、一部の作品ではラテックス塗料を使用し、異なる効果を表現。水彩画は主に風景画に用いると述べ、この素材が時間の印象を表現するのに適しているからだという。

家庭についても述べた。彼は妻と3人の子供たちから受ける支援について満足そうに語った。Maclovioは仕事と絵画への情熱をうまく両立させており、子供たちに芸術への愛を植え付けている。休暇で異なる都市を訪れる際、最初に美術館を訪れて様々なアーティストの作品を楽しむのが習慣となっている。

(つづく)

4. 日本人移住地訪問記(5)

—コロニア・サンファンとコロニア・オキナワを訪ねて—

風景写真家

松井 章

<苦難の末に拓かれたオキナワ移住地>

オキナワ移住地を訪れた2024年6月は、開拓から70周年という節目の年でした。第二次大戦後、戦災で激しく疲弊していた1954年、当時の沖縄県から、この年、約300家族が長い船旅を経てブラジルに上陸、さらに鉄道に乗り換えて、ようやく「うるま移住地」に入植しました。

ボリビア政府との協定により提供された「うるま移住地」は今のオキナワ移住地よりも、もっとアマゾンの奥、グランデ川の上流にありました。しかし、この移住地は、唯一の都市であるサンタクルスから遠く、何より道路も生活基盤も何もないジャングルの中でした。さらに、低湿地帯に位置していたため、生活は過酷を極めたそうで、その上、謎の風土病が蔓延して多くの人が亡くなつたことから、翌年の1955年には、この移住地を放棄することになりました。

代替の移住地として用意されたのは、現在のオキナワ移住地の近くにある「パロメア(パロミティージャ)」と呼ばれる地域でした。うるま移住地を脱出して、一旦はこの地に住み始めましたが、ここも農業の将来性に限界があることから、一時的に腰を落ち着けるだけで、再び別の場所に移住地を建設することになります。

1956年、ボリビア政府と日本の支援機関との交渉の末に、よりサンタクルスに近い現在の地に「オキナワ移住地」を建設し、今に至ります。この土地もまた、道路も設備も何も無いアマゾンのジャングルでした。再びゼロから移住地を建設することになったのです。

移住地を2回も変更して、その度に森を切り開くことは、どれほど大変なことであったでしょうか。オキナワ移住地の歴史は想像を絶する苦難の連続でした。しかし、初期

の2つの移住地での経験を経て、コミュニティはより団結して、きっと現在の繁栄を支える礎となつたに違いありません。稲作の成功などを通して、人々の生活はようやく少しずつ安定するようになりました。

その後、人口増加により、60年代にコロニア・オキナワ第2移住地、70年代には第3移住地も建設されました。3つの移住地を合わせると、面積は約2万ヘクタールにも上ります。

<オキナワ第一日ボ学校を訪れて>

生活が安定してくると、まず子女の教育環境を整えたいと、1987年、オキナワ第一日ボ学校が設立されました。子女に日本語を教えるために、午前はスペイン語での教育、午後は日本語の教育がされています。



写真4-1 オキナワ第一日ボ学校の正門

JICAの青年海外協力隊の河内華さんと、サンタクルス在住の日系人黒岩幸一さんが一緒にオキナワ第一日ボ学校を案内してくれました。学校では午後の授業が始まっていたので、子供たちが勉強しているところをそと覗かせていただきました。日本語の授業中でしたが、子供たちは一生懸命に取り組んでいました。子供たちは人懐こく、目が合うとすぐに笑顔で応えてくれたのが印象的です。

現在のオキナワ第一日ボ学校の抱える問題としては、生徒数約130名で、その内、日系人が約3割、ボリビア人が約7割に上ります。時代とともに、オキナワ移住地における人口構成と同じように、日系人の生徒の割合が減って

きているそうです。そのため日本語講師を雇うことも難しくなり、日本語教育の運営も厳しい状況です。実際に、各家庭でも日本語を使用する割合は小さくなり、日本語を使用する場所も無いことから、若者の日本語力が上がらないのが現状です。



写真4-2 日本語クラスで学ぶ子供達

＜沖縄文化の継承＞

オキナワ第一日ボ学校では、また、沖縄文化の継承にも力を入れており、三線やエイサーなどの沖縄の伝統舞踏や音楽を授業に取り入れ、行事などに参加しています。学校のすぐそばにある文化会館で、琉球國祭り太鼓の新垣美奈さん、琉球舞踊の安里三奈美さん、三線演奏の比嘉悟さんに集まっていたとき、撮影させていただきました。その光景はほとんど日本にいるような感覚です。はるか遠いボリビアの大地で、70年を経て、今も沖縄の文化を大切にしていることがひしひしと伝わってきました。



写真4-3 沖縄伝統舞踊と琉球國祭り太鼓と三線も学んでいる

＜コロニア・オキナワで出会った人々＞

◆屋良商店で出会った人々

その後、メインストリート添いにある屋良商店に向かいました。食料品を中心に扱うお店で、日本の食材もたくさん販売されています。カレーや昆布つけ、調味料など、一通りの日本食は揃えられています。これらの商品は、ブラジルから輸入しているそうです。

お店を経営する屋良恵さん、屋良千恵子さん、そして長く従業員として勤めるエリアドラ・アナミさん、そしてサンタクルスで建設会社を経営する諸隈幹雄さんもお客様としていらっしゃったので、一緒に記念写真を撮りました。



写真4-4 屋良商店にて

◆新垣さんご家族

次は、すぐ近くにある新垣眞永さんご自宅を訪問しました。85才の新垣さんは25才のときに、子供を連れて家族でこの地に入植しました。当時、ヤンマーの脱穀機なども日本から持ってきたそうです。ジャングルに囲まれて車もまともに通行できなかったために、近郊の都市サンタクルスに行くには徒步で3日もかかったそうです。釣りを好んでいたので、ときには500キロも移動してアマゾン奥地に釣りも行ったりと、苦労の中にもこの地ならではの豪快な喜びを感じさせる話もありました。入植当初は困窮を極め、食用のバナナや、アブラナ科の根菜であるマカを天ぷらにして食べることもあったそうです。

新垣さんのお話を聞くうちにご家族がどんどん集まりました。新垣純 エリック・チアゴさん、新垣慶 レーネルさん、新垣愛希さん、新垣久美子さん、新垣眞 ロンドさん、新垣

まゆみさん、新垣善ミゲルさん、新垣愛結さん。今では子供9人、孫は16人もいる大家族です。

大きな自宅の庭には木が生えています。昔は小さな木であったそうで、ご家族を象徴しているように思い、木と一緒に皆さんの集合写真を撮らせていただきました。



写真4-5 庭の大木の下、新垣さん一家集まる

◆前オキナワ日本ボリビア協会・会長の故中村侑史さん再び文化会館に戻り、オキナワ日本ボリビア協会・会長の故中村侑史さん、事務局長の比嘉智さんにご挨拶させていただきました。故中村会長からは直接、入植当時のお話を聞くことができました。大変お元気そうだったので、この記事を執筆中に訃報を聞き、大変驚きました。

中村さんは、みなさんが口を揃えて言うように、ここに辿り着いて目にしたジャングルは想像とは全く異なる過酷な環境で、ただただ一日を生きるしかなかったとおっしゃっていました。電話はもちろんないので、遠く離れた日本政府に何か言うことさえできず、「ただ黙っているしかなかった」という心境を語っていました。

故中村会長は長くオキナワ日本ボリビア協会のために尽力されていますが、なかでも特に「道路整備」にはとても注力されてきました。日本政府の支援はとても重要です。

入植当初は、自分たちで切り開いた道は、雨季には泥沼化して孤立するほどに交通条件は劣悪でした。そうした中で、日本政府からの本格的な支援が始まるのは、1960年代後半からです。サンタクルス市とコロニア・オキナワを結ぶ道路の整備に、政府開発援助(ODA)が投入され

るようになります。道路・橋の整備は、農産物(大豆・綿花・米)の輸送には直結するので、これにより移住地の生活は安定へと向かいました。1980年代からは、JICAによる支援として、道路などのインフラ整備だけではなく、農業や教育、福祉の指導などが始まります。コロニア・オキナワの農産物はボリビアに大いに貢献をするようになりましたが、その背後には日本による長期的な支援があったのです。

故中村会長からは「あと3時間は話せるよ」とのこと、まだまだ話して下さる気持ちを感じましたが、途中で辞して来ましたが、今になると残念に思います。



写真4-6 故中村侑史氏

中村侑史さんのご冥福をお祈りいたします。

※本稿ではJICA海外協力隊の河内華さんに細かい情報の確認などでご協力いただきました。ありがとうございます。
(つづく)

5. ボリビア開拓記外伝

—コロニアオキナワ 疾病・災害・差別を
生き抜いた人々 13

一般社団法人日本ボリビア協会

相談役 渡邊 英樹

ゆうしじょうけん くのう
融資条件そろわづ苦惱

かいがいいじゅうじょうだんほんぶ
海外移住事業団本部から、コロニアオキナワ
のうばくそううきょうどうくみあい どうにゅう くりわた
農牧総合協同組合(CAICO)が導入する繰綿プラント
あたまきん そうとう まんせん ゆうし そうきんじゅんび
の頭金に相当する13万8千ドルの融資の送金準備がで
むねれんらく ゆうし ばあい つうじょう ひつよう
きた旨の連絡があった。融資の場合は通常、必要
しきん せんがくかつ かなら じこしきん
資金を全額貸し付けることはなく、必ず自己資金が
ひつよう
必要になる。

かりいれしんせいしょ くみあい せつりしゅっしきん
CAICOの借入申請書には、組合の設立出資金とし
まん けいじょう じこしきん
て4万ドルが計上してあり、これを自己資金とみなしてい
そうかい かいさい しゅっしきん
た。そこで、CAICOの総会を開催してもらい、出資金
にゅうきん ぎんこうこうざ かいせつ ねが
を入金して、銀行口座を開設してほしいとお願いした。
くみあい かね あつ へんじ
ところが組合はどうしてもお金が集まらないとの返事
だい みやぎとくしょくみあいちょう こうちひろしり じけん
だ。第1コロニアから宮城徳昌組合長、幸地広理事兼
しはいじん おおしろかずおり じ きんじょうたつみかんじょう とうまとくぜん
支配人、大城一夫理事、金城達巳監事長、当真徳善、
やましろやすのり かくりじ だい
山城保徳の各理事、第2コロニアからは山城興喜副
くみあいちょう ともりきんざぶろう うえちていとく かくりじ いじょう かたがた
組合長、友利金三郎、上地貞徳の各理事(以上の方々
ぜんいん にゅうしょくしゃ だい
は全員うるま入植者)、第3コロニアからは中村侑文
りじ みやざきよしかんじ
おも
理事、宮里清監事がおられたと思う。

あつ わたし と もととこ
「いくらなら集まりますか?」と私が問うと、元特高
けいさつかん きんじょうかんじょう いじゅうち かん すいかい
警察官だった金城監事長が「移住地は干ばつと水害
ひへい
で疲弊しきっていて、もうどうにもならない」と怒りとも投

げやりともとれる語調で言った。2階に上げられてハシ
はす おも
ゴを外されるとはこのことかと思った。

ねん いじゅうち がつ がつ あめ
しかし、1971年の移住地は3月から11月まで、雨が少
ふ くさき か いちめん かつしょく や
とんど降らなかった。草木は枯れて一面が褐色の焼け
のはら じょうたい いなさく しゅうかく ちか
野原のような状態で、稻作の収穫はゼロに近かった。
じゅうみん せいかつ こんきゅう けいざいてき せいしんてき う
住民の生活は困窮し、経済的にも精神的にも打ちの
めされていた。そのため「それはないでしょう」という
こうぎ ことば だ
抗議の言葉も出せなかつた。

か い しんせいしょ けいじょう よてい しゅっしきん あつ
借り入れ申請書に計上・予定されている出資金が集
まらず、融資条件である貸付金の20%に相当する
じこしきん つた ふかのう ゆうし
自己資金の積み立ても不可能ということになれば、融資
きてい したが かつ ちゅうし いがい
規定に従うと貸し付けは中止する以外にない。しかし
きてい がくめんどおり したが ゆうし ちゅうし とうきょうほんぶ
規定に額面通り従って、融資の中止を東京本部へ
ほうこく きも
報告する気持ちには、どうしてもなれなかつた。
しようらい む きぼう あ とも
ここで、将来に向けての希望の明かりを灯さなければ
ほうかい む だれめ
コロニアオキナワが崩壊に向かうであろうことは誰の目
あき じこしきん ちか かたち
にも明らかだつた。「どうやつたら自己資金に近い形の
うだ だい ひとり
ものを生み出せるだろうか、そんな大それたことを一人
かんが ごくひ
で考えて、それを極秘にやれるはずもなかつた。

むじょうけんゆうしいらい
トンに無条件融資依頼

かいがいいじゅうじょうだん しぶ しぶ ちゅう とうだいそつ
海外移住事業団サンタクルス支部の支部長に東大卒
のうりんしょう すえながしょうすけ ちやくにん き
で農林省キャリアの末永昌介さんが着任したのを機
わたり し ぶ ちゅうたく ある ふん ばしょ てんきよ
に、私は支部長宅から歩いて5分の場所に転居してい

た。



写真5-1サンタクルス近郊の樹海を背に末永支部長(左)と筆者(1971年)

いつでも何事についても末永さんに相談できるようにするためだ。末永さんは、極度の不眠症だった。聞けば、がくとどういん きんろうはうし ながさき ぐんじゅこうじょう 学徒動員の勤労奉仕で長崎の軍需工場にいたときにくうしゅうけいはう な きんがん すえなが ぼうくうごう 空襲警報が鳴った。下近眼の末永さんが防空壕にたどり着いた時には満員で入れてもらえず、工場の軒下でふる ばくふう た 震えながら爆風に耐えたという。

くうしゅう お み じぶん い 空襲が終わって見たら、自分が入れてもらえなかったぼうくうごう ちょくげきだん くろこ したい 防空壕が直撃弾をくらって黒焦げのバラバラの死体がさんらん いらい ふみんしよう い 散乱していたという。それ以来の不眠症と言った。

り やはん そら しら はじ ぎろん そのため、2人で夜半から空が白み始めるまで議論することが常態化した。睡眠不足は、南米特有の3時間ひるやす おぎな の昼休みすなわちシェスタで補った。

つか おとこ み い 「こんな使いづらい男はこれまで見たこともない」と言いつぼう りんぎしょ か われたが、その一方で「稟議書は書かなくていい。俺のなまえ ちょくせつ か い 名前で直接カーボンで書いてかまわない」と言ってかなじゅう いっしんどうたい たが いま り自由にさせてもらった。一心同体のごとく、互いが今、

なに かんが わ あ おも
何をどう考えているかを分かり合えていたからだと思

う。

すえながし ぶ ちょう しこう とき じぶん ち い せけんてい
末永支部長は、思考する時、自分の地位、世間体、めいしょん す きら かんじょう そんとくかんじょう
名譽心、好き嫌いの感情、さらには損得勘定などをいすべ き す ふつう にんげん ぬぐ さ
つたん全て切り捨てる。普通の人間が持つ去ることのじこ ちゅうしん してん はい ものごと ほんしつ
できない自己を中心とした視点を廻し、物事の本質にせま するど みぬ ちから も けう ひと
迫り、鋭く見抜く力を持った希有な人だった。

いば
それでしながらオトボケなところもあり、威張ることがま
みな
つたくなかった。そのためコロニアオキナワの皆さんから
けいあい
も敬愛されていた。

かいいかいいじゅうじょうだん ゆうし う
CAICOが、海外移住事業団から融資を受けるのに
ひつよう まん じこしきん くめん すえなが
必要な4万ドルの自己資金の工面についても、末永さんとあさがた ぎろん かさ かん すいがい
朝方まで議論を重ねた。CAICOは干ばつと水害で
いっせん なに う だ
一銭もないという。ゼロから何かを生み出さなければ
み じこしきん
ならない。しかも、どこから見てもCAICOの自己資金と
ていさい と きんり しはら
いう体裁を取らなければならない。金利の支払いが
はっせい たんば い じこしきん
発生したり、担保を入れたりでは、自己資金とはみなさ
すえなが いつてん もさく づ
れない。末永さんとその一点を模索し続けた。どんなに
かんが みょうあん
考えても、そんな妙案があるはずはなかった。

かんが すえ たんじゅんめいかい
あれこれ考えた末に「もつとも単純明快なことにし
ものごと しんり い つ
か物事の真理はない」というところに行き着いた。できる
べつもんたい
できないは別問題である。

むりし むたんば むきげん とほう
すなわち、「無利子、無担保、無期限」という途方もない
じょうけん かね か かね ひと
条件でお金を借りるということだ。お金を持っている人
ねが せんたくし けつろん
にお願いしてみるよりほかに選択肢はない。結論がこれ

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

わたし おも う じんぶつ
だった。そして、私たちが思い浮かべた人物がホセ・

かわい 河合さんだった。

かわい し シ
河合さんはラパス市にあるトヨタ・ボリビアーナ社のオーナー社長で、ボリビアの日系人の中で一番の大金持ち

かわい はくじんちゅうしん
といわれていた。河合さんは、それまでの白人中心の社会では考えられもしなかった先住民族の人々に

くるま かっぷはんぱい はじ ざい ひと
車の割賦販売を始めて財をなした人だ。

とうじ とうとう ふくすう にほん おおて
当時、ブリヂストン、コマツ等々の複数の日本の大手

きぎょう だいりてん けん かいしゃ
企業の代理店も兼ねており、その会社は、ボリビアで5

ゆび はい ゆうめい かいしゃ
の指に入るほどの有名な会社であった。

よ ご
ドン・ホセと呼ばれていたが、スペイン語の「ドン」は「ゴッドファーザー」を意味しており、まさに日系人社会では、それにふさわしい人という意味で敬愛を込めて、そう呼ばれていた。「どうせやるなら、一番の人に当たろう」とその河合さんにお願いしてみるしかないとの結論に達した

のだ。

(つづく)



琉球新報社のご厚意で転載させていただきます。

ご関心を持たれた方は下記琉球新報社URLをご覧ください。

<https://store.yukyushimpo.jp>

外務省人事異動短信

小野村拓志大使 12月2日 帰朝発令

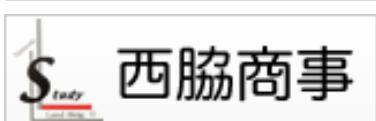
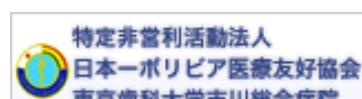
(1月6日 帰任予定)

折原 茂晴大使 12月11日 駐ボリビア大使発令

(1月中旬 起任予定)

編集部

椿 秀洋 細萱 恵子 大川 裕司



Copyright© 2002-2025

一般社団法人日本ボリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)